

中国の春節にまつわる伝説

鈴木 健之

中国では陽暦一月一日を元旦ユアンダンと称するが、この日一日だけが休日である。これは便宜上グローバル・スタンダードに義理立てしたかっこうである。中国は古くから旧正月すなわち旧暦の正月一日を歳首として祝う習わしだからである。中国が西暦を採用したのは、中華民国元年一九二二年一月一日（清の宣統三年辛亥十一月十三日）からで、政府は以後太陽暦である西暦を主とし陰暦を兼用とした。一九一四年一月からは陰暦の正月元旦を春節チンヂェ（春節はもともと二十四節気の立春の日のこと）と、陽暦の一月一日を元旦と称すると定めた。この定めを今も踏襲しているわけである。中国は二千年以上も前から太陽暦に太陽暦（二十四節気）を調和させた旧暦を一貫して用いてきた。春節、清明節、端午節、中秋節の四大節日をはじめ、伝統年中行事はみな今なお旧暦に則って行われている。昨年二〇〇六年は一月二十九日が春節で、この日から公的機関や会社は全国一斉に一週間の休みとなる。春節期間の特別旅客運送を「春運」と言う。報道によれば、政府筋は、この日前後四十日間に帰省

や旅行のために移動する大陸の中国人は延べ二十億四千二百万人に達するであろうとの予測を発表した。まさに熱狂的な民族大移動である。二〇〇五年からは、中国大陸に進出している台湾ビジネスマンとその家族の里帰りのために、春節をはさむ二十数日間に限って大陸上海と台湾台北間の直行便が特別に認められるようになり、昨年は七十二便が就航した。東南アジアやその他の地域のチャイナタウンの華人華僑たちも毎年春節を心待ちにしている。年の更新の祝祭春節に対する中国人の愛着と高揚は一通りでなく、深奥である。春節の主な伝統行事や風習にまつわる伝説を紹介しよう。

竈神 かまどがみ 旧暦十二月二十三日（南方の一部では二十四日）に「送

竈」ザオジン「祭竈」をする。この日各家に祭られている竈神（竈王ザオワン、イユ、ザオジン、イユ、ザオジンとも）が天上の至高神たる玉皇大帝に下界の人間の一年間の良い事、悪い事を報告しに昇天すると信じられ、厨房で竈神に供物を供え線香をあげ、紙銭を燃やして送り出す。竈神は大晦日か元日に戻ってくる。竈の壁の上に貼られた竈神の画像は正月飾りの木版刷りの年画の一種で、夫婦像の場合もある。絵の両側に「上天言好事、下界保平安」（昇天して好い事を言っってください、天下つては平安をお守りください）などの対聯が貼られる。供物中の飴を神像の口になすりつけたりする。これは竈神に「甜言蜜語」（甘い言葉、聞こえの良い事）を言ってもらうためとも、或いは飴で歯にねばりつかせて奉告に口ごもらせるためだとも解釈される。普通このころから新年を迎え

る準備を開始する。竈神の行事や信仰はもはや衰退したが、この神の素姓を説く伝説のほうはなお余命を保っているらしい。四川省奉節県の伝説。

長者の張員外が一人息子張猷生の運勢を易者に見てもらったところ、将来家の身代をつぶすと見立てが出る。さらに易者に家柄が劣る李氏の娘を紹介され、息子は結婚するが、すぐに李氏を離縁する。家を追い出された李氏はあてもなくロバの行くに任せ、ロバが歩みを止めた家の人と結婚しようと決める。ロバはある洞窟の前で止まり、その洞窟には母と渡し守の息子が住んでいた。息子は背中が曲がり、皮膚病。これも運命とあきらめ、祝言のために酒と鶏を買いに行かせようと銀貨を渡すと、息子はこんな石ころなら洞窟にいくらでもあると言う。息子はムカデが入った鶏料理を食べたところ、背中がびんとし、皮膚病も治る。二人は洞窟の銀塊を元手に家を建て、田畑を買っていい暮らしをする。慈悲深い李氏は毎年乞食に施しをしていた。一方張猷生は妻を離縁してから暮らし向きが悪くなり、身上を食いつぶして乞食になる。施しを求めて李氏宅を訪ね二日間行列に並ぶが、めぐり合わせが悪くて食べ物にありつけない。不運をかこつて泣く前夫の声に気づいた李氏は、張を家に入れ飯を食わせ、銀子の入った包みを背負わせて「この包みは人によつてはいけません」と言い聞かせて出させる。張は李氏の夫の渡し場に来る。張は対岸に着いて銭を持っていないので、渡し賃がわりに重た

い包みを置いて行く。渡し守が包みをあけると中はすべて銀子。李氏は夫に「その男がうちから盗んで行ったものに違いない。すぐ連れ戻してください」と頼んで連れ戻し、張を厨房に入れて元の妻であることを明かす。張はすまながり、会わせる顔がないと竈の中にもぐりこみ焼け死ぬ。李氏もそのあとを追って竈の中で焼け死ぬ。人々は二人の死体がないので、二人の名前を書いて竈の口に貼った。彼らが天に昇る日十二月二十四日の晩にご加護を願って祭るようになった。⁽¹⁾

この代表的な竈神由来譚は「張郎と郭丁香」「張郎休妻」（休は離縁するの意）などとも題されて、民間故事だけではなく、芝居や語り物としても広く伝承されてきた。また、この話がわが国の炭焼き長者再婚型、運定め男女の福分の昔話や蘆刈説話と類似していることは従前より指摘され、その類縁性や対応関係について論議が多くある。⁽²⁾

「年」^(ニエ)の伝説 年末年始は「忙年」と言つて、男も女も一年の締めくくり（大掃除、付けや借金の清算など）や年越しの支度、祖先と財神などを迎える祭祀、年始回りなど諸々の行事のために大忙しである。忙しいのは人間ばかりではない。てぐすね引いて待つていた、人に悪さを働く魍魎魍魎がこぞとばかりに跳梁跋扈するのもこの時期である。人に加勢し救うために権化する神仙たちもまた慌しく上り下りする。魔除けの呪い、縁起担ぎ、禁忌などがこの期間とりわけ多く集中するわけである。大晦日^(ニエ)に年という人喰いの化け物が出没するという言い伝えは

全国的に広く流布している。福建の例を挙げれば、

昔々、人や獸を喰う年は山の洞穴に棲んでいたが、春が来る前に山から下りて村人を喰った。ある大晦日の夕暮れ、勇敢な二人の牧童が家人の止めるのも聞かず牛の放牧に出た。牛の群が固まったので鞭を打つと、一匹の怪物が悲鳴をあげて逃げて行った。二人は牛に鞭を入れながら逃げる年を追いかけた。年は呉爺さんの家の前まで来ると、びっくりしてくびすを返して村の奥へまた逃げた。呉爺さんのうちに赤い服が干してあった。日暮れて家々の窓からもし火の光が漏れていた。年は目がくらんでまた背を向けて逃げた。二人はわざと鞭を打ち鳴らして年をおどかし山中に退散させた。村に戻った二人は「年は鳴る音、赤い色、火の光が怖いんだ。僕らはやつを防げるぞ」。さっそく村人は村の入り口にかがり火を焚き、二人が竹を火の中に一本一本くべると、パンパンとはぜる音がした。果たして何匹かの年がかり火と竹の破裂音に驚いて山に逃げ帰った。村人は無事に正月を迎えることができた。この時から、人々は正月一日を「過年」(年を越す)と呼び、赤い紙に吉祥の対句を書いた「春聯」を貼り、爆竹を鳴らし、ろうそくを点し、赤い服を着るようになった。⁽³⁾

一般に鞭炮^{レシエンパオ}、爆仗^{ベオジャ}と呼ばれる爆竹は、実際最初は竹を火中に投じていた。北宋時代十二世紀に至って火薬を紙に包み巻いた単発のものが現れ、南宋になって現在のような連発の爆竹ができた。二〇〇七年二月十七日大晦日、北京市で火事、事故の

原因になるという理由で永らく禁止されていた爆竹と花火が解禁になった。どうやら市民の声に折れたらしい。めでたい時の景気つけに爆竹は欠かせないのである。お正月をねらって危害を加える同じ仲間に祟^シがある。浙江省麗水市の話。

全身まっ黒で手だけ白い妖怪祟^シは、毎年大晦日の夜、一家が団欒の晩餐「年夜饭」を食べた後、戸の隙間から潜り込み寝付いた利口な子供にとりついて熱病にかからせ気を狂わせてしまう。祟にとりつかれないように皆で一晩中明かりを点し寝ないでいる。これを「守祟」と言った。ある夫婦と一人息子が守祟をし、その子供は一枚の赤い紙切れに穴あき銭八枚を包んだり開いたりしてもあそんでいたが、やがて寝入った。夜半過ぎ、一陣の風とともに祟が忍び入り子の頭をなでようとすると、枕元から閃光が走り、祟は悲鳴をあげて一目散に逃げて行った。翌日子供はいつものように元気に跳びはねていた。夫婦はこの出来事を触れ回り、赤い紙に包んだ銅銭が祟を退散させたといううわさが広まった。よその家も赤い紙に包んだ銭を子供に与え枕元に置かせると、祟はもう出なくなり、これが習わしとなった。銭八枚は八仙人の化身として子供を守ってくれると考えられ、「八仙銭」と呼び、また祟を鎮めるので「庄崇銭」とも呼んだ。祟が出なくなつてから、祟と歳が同音なので、「守歳」「庄歳銭」と言うようになった。⁽⁴⁾

年夜饭は「団年飯」「団円飯」とも言い、絶対に欠かすこと

ができない家族団欒と再会の円居である。最近は都市ではホテルやレストランで楽しむ家族が多い。压岁钱、压岁钱は又の名「压岁錢」。古くから銅銭は魔除けの呪い物とされるが、疫病神、悪鬼に祟られないための一種の賄賂とも考えられる。いつのころからか、年長者が子供に贈るお年玉となった。压岁钱は当節経済成長を反映して高騰し、都会の小学生なら三百元から五百元（一元は約十五円）が相場とか。守歳の習わしも、テレビの大晦日恒例の歌謡バラエティー・ショー「春節聯歡晚会」を深夜遅くまで家族打ち揃って見る習慣として生きている。四川省巴県では、人喰い妖怪を夕と言い、昔ある狩人が大晦日に住民たちに大音響をたてて夕を追い立てさせ、これを射殺した。かくて人々はこの日を「除夕」と呼び、夜通し起きて爆竹を鳴らすようになった。怪鳥「九頭鳥」の言い伝えも息が長い。すでに唐代の書『嶺表録異』巻中に「九首の鬼車」として登場し、しばしば正月に飛来し、首から滴った血が降りかかった家に災禍をもたらすと言われ、山西、河南の一部の地方で、大晦日に各家で柏樹の枝を燃やしいぶす習わしは九頭鳥の襲来を防ぐためだという伝承が今も伝わる。

福字 家々では門扉に福の字を書いた赤い紙を◇形に貼る。この習慣の由来については、十四世紀明王朝の開祖朱元璋に託された話がよく知られている。例えば、

太祖がお忍びで南京の正月十五日元宵節の灯笼祭りを見物に出た。ある家の飾り灯笼の前に人だかりがして灯笼の絵を

見ている。大きな足をした醜い女が馬に乗り、その足に小猿がしがみついている絵。太祖は、わが妃は姓が馬、白雲頭の不器量で大足（纏足をしていない足のこと）、自分は猿のような顔、これは我らを嘲弄するものにほかならない、と考えた。彼は後で捕縛するためにしるしに誰にも消されない字「福」をその家の門に書いておいて宮殿に帰った。馬皇后は太祖からこの事を聞いて、その夜のうちに家来を街に遣わし、どの家も福の字を門に書け、門に福字のない家は一家断絶に処すると触れさせた。町民はみな急いで門に福字を書いた。あくる日、一家打ち首にせんと遣わされた太祖の家来がぐだんの一軒が見つからぬと戻って来た。太祖は馬皇后の差し金と察して、この件はそのまま沙汰止みとした。以来、民間では毎年春節に門上に福を貼るようになった。

明朝開国物語の明代小説『英烈伝』の主人公である朱元璋に關しては、安徽、江西、浙江を中心にかなり広く愛憎半ばする豊富な伝説が今も伝わっている。この型の伝説はまた人物設定を清の乾隆帝と皇后に代えて伝える所もある。現在福字をさかさまに貼る家も多い。これにも謂れがある。

清代、ある年の春節に西太后が福字を沢山書かせ、宦官の李蓮英らに宮中の諸処に貼らせた。ある福字がうっかりさかさまに貼られているのを西太后に見咎められる。李蓮英は震えながら口から出まかせに「さかさまに貼るのは大変縁起が良いです。さかさまに貼るとは福が到る（福到）の意味で

す(さかさまの倒と到るの到が同音なのを効かせた)」と答え、西太后を喜ばせた。以来これにならってさかさまに貼る人が現れ、今日まで伝わっている。⁽⁸⁾

役柄を清代恭親王の正室と執事に代えて北京恭王府邸での同工の異文もある。この習慣はあまり古くはなく清代から起ったのかもしれない。事の起こりは貧しい農夫の夢枕に立った福の神が、さかさまに福字を貼れば福が来ると託宣し、それが正夢となり、この御利益の話が基でこの習わしが広まった、という話もある。⁽⁹⁾

門神 武者絵を門扉左右に貼って魔除けにする習慣は今も残っている。秦瓊(しんけい)尉遲敬徳(じゆちけいとく)の二將軍が有名である。

唐の太祖李世民の宰相魏徵は明日の長安の天気が微風小雨であるのを予知した。涇河の龍が玉帝の命令に逆らってわざと大雨を降らせたので、長安はひどい水害に見舞われた。玉帝は怒って魏徵に明日の昼時に龍を切り殺すよう命じた。龍は太祖の夢の中に現れ、魏徵に自分を討たせないように命乞いをし、太祖は承諾する。太祖は翌日の昼時に魏徵に碁の相手をさせた。魏徵は対局中にうつぶして寝てしまう。やがて目覚めた魏徵は今しがた龍を切りましたと言う。その夜、太宗の夢に龍が出て、あなたは約束を反故にしたと太宗を責めた。毎晩龍の夢に悩まされた太祖は門番として秦瓊、尉遲敬徳に護衛させた。出征する二人に代えて、魏徵は門に両人の画像を貼らせると、龍の魂は現れなくなった。それから民間

でも大晦日に二人の画像を門に貼るようになった。⁽¹⁰⁾これは元代、呉承恩作『西遊記』第十回に見える挿話と同系統であることは明らかである。

注

- (1) 『中国民間故事集成四川卷(上)』四五二―四五三頁「敬寵王神」。以下書名の『中国民間故事集成』は省略。
 - (2) 『口承文藝研究』第十七号「特集炭焼き長者系説話の比較」、一九九四年、及び故伊藤清司氏の炭焼長者譚に関する一連の論考を参照されたい。
 - (3) 『中華民俗源流集成節日歳時卷』五六頁「春節的米歴(二)」
 - (4) 『浙江卷』五四六―五四七頁「守歳与庄歳銭」
 - (5) 『四川卷(上)』四五四―四五五頁「除夕」
 - (6) 『山西卷』三四八―三四九頁「燒柏樹枝的伝説」山西襄汾県。
 - (7) 『河南卷』三二〇―三二二頁「拉天灯」河南南陽県。
 - (8) 『江蘇卷』「門上貼『福』字的由来」泰州市
 - (9) 『吉林卷』三二二頁「福」字倒貼的由来「四平市
 - (10) 『江西卷』四五〇―四五二頁「福」字為何倒貼」高安県
 - (11) 『寧夏卷』二二八―二二九頁「貼門神的由来」惠農県
- (すずき・たけし／東京学芸大学)